

幕末の僧 仙賀せんが

「仙賀」という僧の名前には、なじみのある人はそう多くないかもしれませんが、では、宮小路浩潮みやこうろこうしゅうという名前はどうかでしょう。仙賀とは、太宰府で馴染み深い書家の宮小路浩潮みやこうろこうしゅうが、僧であった時の名前でした。明治に入り、優れた書家として名を馳せた宮小路浩潮は、幕末の太宰府においては僧として活躍した人物でした。昨年、彼が僧としての活動の一端が分かる史料が見つかりました。これらの史料から幕末の僧仙賀の活動を見てみましょう。

宮小路浩潮こと仙賀は、文政9年（1826年）に夜須郡中牟田村の医師森下春台しんたいの長男として生まれました。12歳にして天満宮の社家の一つである六度寺ろくどじの僧岱賀たいがより受戒を授けられ仙賀と名のり、僧としての活動を開始しました。

仙賀の活動を示す年代の分かるものとも古い史料は、弘化2年（1843年）の比叡山延暦寺ひゑさんえんりきじからの補任状よじんじょう（任命状のこと）です。この時、仙賀は法橋上人ほっけうしやうじんという位に任じられています。どうやらこの時期、仙賀は京都の延暦寺で修行をしていたようです。その後、毎年のように新たな位に任じられていき、嘉永2年（1847年）には、権大僧都ごんのだいそうずに任じられました。

修行を終えた仙賀は太宰府へと戻ってきたようで、嘉永5年には六度寺の住職となりました。

太宰府人物志

資料室だより 58

また、嘉永6年の日記をみると、2月に福岡藩2代藩主・黒田忠之くろだただゆきの200回忌の法要を行い、3月には黒田如水くろだにすいの250回忌の法要を行ったことが記されています。また、この年は日照りが続いたようで、6月に2度の雨乞祈禱あまごいせいのたうを行っています。しかし、この雨乞祈禱では雨は降らず、7月に入り雨乞の秘法とされる「水瓶祈禱みづびんせいのたう」が実施されました。仙賀もこの祈禱に参加しており、連日のように岡見山へ登り祈禱を行ったことが記されています。祈禱を行っている間もなかなか雨は降らず、人びとの間に「風説ふうせつ」（うわさ）が巻き起こり、人心不安に陥ったと記されています。それでも、仙賀たちは祈禱を続け、見事に結願けつがんの翌日、大雨が降ったのでした。

現代では、書家として有名な宮小路浩潮ですが、幕末期には六度寺の僧として活躍していた事実が新たな史料によって具体的に明らかになりました。こうした新たな史料によって、これまであまり知られてなかった歴史の新たな一面を垣間見ることができるよう。こうした古い記録や古文書を見たい、知りたい、もしくは何か古文書のようなものを発見した場合は、ぜひ市史資料室へご一報ください。